

令和２年度 第１回東広島市総合教育会議 議事録

１ 日 時 令和２年１０月２７日（火） 開会１４時００分 閉会１５時３０分

２ 会 場 東広島市役所本館３階３０３会議室

３ 出席者 （構成員）

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 津森 毅

委 員 渡部 和彦（教育長職務代理者）

委 員 坂越 正樹

委 員 京極 秀樹

委 員 島本 智子

委 員 西村 恵子

（その他の出席者）

学校教育部長 國廣 政和

教育調整監 田中 宏憲

学校教育部次長兼指導課長 小川 寛

（事務局関係）

総務部長 天神山 勝浩

総務部次長兼総務課長 福光 直美

総務課課長補佐兼行政経営係長 村上 雅之

行政経営係 主任 山本 弦希

４ 議 事 With コロナ時代におけるオンライン授業と対面授業の効果的な展開について

５ 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

With コロナ時代におけるオンライン授業と対面授業の効果的な展開について

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

協議に入る前に、議題につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

本日は、「With コロナ時代におけるオンライン授業と対面授業の効果的な展開について」を議題としております。

市長からもありましたように、新型コロナウイルス感染拡大により、社会全体に影響が及ぶ中、学校現場においても長期の臨時休業とするなど大きな影響がありました。こうした中、本市においてはGIGAスクールの推進として、児童生徒に一人一台タブレット端末を配付し、インターネット環境を活用した教育機会の確保に取り組んでおります。今後は、新型コロナウイルスの感染拡大を懸念しながらも、インターネットを活用した学習環境の確保、児童生徒や保護者と教員の円滑なコミュニケーションを図っていく必要があります。

これからの時代に必要な教育環境を確保するため、市長と教育委員会とで、現在の状況と今後の対応について意見を交換し方向性を共有すべく、本日の議題とさせていただきました。

議題についての説明は、以上でございます。

<高垣市長>

それでは、学校教育部からGIGAスクール構想の推進について、説明をお願いします。

(学校教育部長説明【資料1】)

<高垣市長>

ありがとうございました。

昨年、GIGAスクールを推進していくという大きな方針のもと、先進的な地域で実際にどのような取り組みがされているのかとして草津市でいろいろ見せてもらい、確かにこれで授業は大きく変わるなと思いました。これまでは、令和5年ぐらいまでに1人1台パソコンを配備して徐々に展開していこうと考えていましたが、新型コロナウイルス感染拡大への対応を踏まえる中で、遠隔教育のような仕組みもあれば、学校休業に対して何らかの対応ができたのではないかとということで一気に加速することとなりました。

今回行政としても感じるのが、いかに我が国のデジタル化が遅れているのかということですね。例えば、台湾や韓国のデジタル化はいつの間にか我が国をはるかに超えた状況になっています。市政をあずかる中で様々な分野でデジタル化を推進していく必要があることを感じており、教育においても明治時代から150年になる制度の中で大きな変革期にいないかと思っています。先ほどの動画を見て、本当にこれについていけるのかということを感じましたが、日本人の国民性からするとこういう外部からの危機、外圧があったら一気に変わり得る国民性だと思います。振り返ってみると明治維新や戦後がそうでした。そういう意味でいうと、第3の大きな変革期に我々はいろのたろうという中で今日の意見交換をしていただきますが、教育委員会からGIGAスクールを進めるにあたっていくつかの課題を提起していただきました。教育委員会でいろいろな議論がされて、こうやったらいいのではな

いかという方向性が一定程度あるのだろうと思っており、今日は二つの議題について意見交換させていただきたいと考えています。

一つは、オンライン授業と対面授業のそれぞれの良さを活かせる授業のあり方はどのようなものか。決して全てがデジタル、オンラインということではなく、やはり対面の中で子どもと直接ふれる中での授業というか教育が絶対に必要だろうと思います。それがどういう形でベストミックスといいますか、最適なハイブリットというようなあり方があるのかということ。

それから、先生と子どもたちのコミュニケーションというものが、先ほどの動画でもありましたが変わるような気がします。その中で先生たちにどんなスキルが必要になってくるのかについて、今日は議論させていただけたらと思います。

なかなか切り口が難しいので、まず教育長に東広島市はこんなことを考えているということをご紹介いただき、それに対して皆様方のこれまでの経験あるいは見識の中で、こうした方が良いのではないかとというご意見をいただく形で進めさせていただけたらと思います。

それでは、まずオンライン授業と対面授業のそれぞれの良さを活かせる授業のあり方について、対面授業の良さとオンライン授業の良さをご紹介いただき、こんなふうにしたら良いのではないかとというお話をお願いします。

<津森教育長>

オンライン授業はコロナ禍でとてもクローズアップされましたが、通常の授業として日常的にできる環境というのは相当難しいと思いますし、その必要性がどうかということも正直疑問に思います。ただ、オンライン授業というものが、タブレットないしはパソコンを使って個別の学習ができるものと捉えるならば、いろいろな可能性があると思います。

従って、今回タブレットが入り1人1台あっても学校にずっと置いてあり、使い終わったら充電器に置いて次の日まで使わないという状況ではオンライン学習はできません。先ほど、部長からは小学校3年生以上から持ち帰りを可能にするという話でした。持ち帰ることによって、自分の分からないところから学習できる、個別化していくことができるという意味で、ぜひとも持ち帰って活用できることに期待していきたいと思っています。

例えば、新しい漢字の書き取りでは筆順から出て来ます。こういったものが無かった時代は、新しい漢字を20個ずつ書いて来なさいと子どもに言うと、中にはうそ字を20個書いて来たりすることもある。それは、子ども自身が家庭で自分の学習を評価する道具を持っていないからです。タブレットにそういう機能があるということは、家庭学習が大きく変わっていく可能性があると思います。そしてそのことが、学校での学習とどういう形で関係していくのか、その部分にオンライン授業と対面授業の良さをそれぞれ活かす鍵があるように思っています。

<高垣市長>

確かに問題の前提がオンラインで様々な可能性があるわけですが、常時使うわけではない。例えば、休校になるとか、長い期間の学校休業のような時に初めて意味を持つ。あるいは遠

隔授業であれば、海外とのやり取りといった様々な可能性があるのですが、オンラインとデジタルを分けて考えてもいいかもしれません。それと対面授業をどう組み合わせていくのかということになるのだらうと思うのですが、渡部委員いかがでしょうか。

<渡部委員>

オンラインの授業ということで、パソコンなり新しいソフトをどういうふうに使いなすか、個人あるいは教室でどういうふうにするか、本当に上手く操作できるのかということをご心配していたのですが、先ほどの動画を見ますと子どもたちは早く慣れるのかなという気がしました。それから先生方もだいぶ勉強なさったと思いますが、結構できるのだなという感想を持ちました。要するにこのICTを利用する教育というのは、使いこなせるかどうかだだと思います。使いこなせると、子どもは子どもなりに創造をたくましくして新しい知への道筋といいますか、そういったものを掴めるのではないかと思います。その中でおそらく、個人差というのが随分出てくるのではないかという気がしました。ですから、そういうところを上手に指導していけば、学習の効果はあるのではないかとみています。

もう一つ言わせていただきますと、家庭で先生とのコミュニケーションをとるわけですが、家庭の場合には全くパソコンなどを使ったことが無い場面も結構多いと思います。子どもがパソコンを持ち帰って学習するのは重要ですが、1人でなかなかできないところを家庭で上手に対応できるのだらうかと思いました。その点については、それなりの塾のようなものが必要なのではと思いました。

いろいろと課題があると思うのですが、学校で昔からいわれている知育・徳育・体育というものがあります。このシステムというのは、その中で知育がメインかなと思います。徳育というのは、道德の教科書などを分かりやすく映像で見せることができるかもしれませんが、本当の意味の徳育とは友達同士での対話や先生との対話です。そういう点ではどうなのかなと思います。体育にいたっては、だいぶ違う次元かなと思いました。もちろん、人の体の動きやスポーツ科学的な知識などを理解するには良い機会だと思いますが、学校での体育や徳育については十分詰めておく必要があるのではないかと感じました。

<高垣市長>

個人の能力を引き出すと言いつつも、やはり個人差が相当出てくるのではないかという懸念は私も持っています。さらに、各家庭環境によって大きな差が出て来るのではないかと。ICTに対するリテラシーの高い家庭とそうでない家庭の差が歴然と出て来る可能性があり、そのあたりをどうサポートしていくのかというのも一つ課題だらうと思います。やはり、知に偏重したような感じもしますので、このあたり教育委員会で、知も徳も体育もこの仕組みの中でやっていくというようなことがあれば紹介いただきたい。

<津森教育長>

徳育、体育の部分で、デジタルでどうこうするということについては現状まだ考えていません。

<高垣市長>

これも大きな問題になってくるのだろーうと思います。坂越委員いかがでしょうか。

<坂越委員>

今の話の続きからさせていただきます。確かに徳育というのは対面的な要素がすごく大きいと思いますが、これも使いようで、例えばデジタルで外国の人たちとコミュニケーションをとるとかで異文化の理解がすすみます。あるいは環境問題についての情報などは、インターネットの世界に山ほどあります。そういうものをどんどん活用して、知識に基づいた判断力なり関心を高めていくという試みはいくらでもできると思います。

それから、中教審の資料をお配りしていますので、その件でよろしいでしょうか。初等中等教育分科会の特別部会において、令和の日本型学校教育の構築ということで動いております。10月の分科会で報告があったのですが、この令和の日本型というのが文字どおり1ページ最初のところにあるように、総論でもソサエティ5.0、ICT、それから先行き不透明な時代というようなことで今の教育課題についての前提から出発していることが分かります。そして、働き方改革の問題、GIGAスクール構想、こういったことが令和の学校教育だというのが確認されます。

次のページを見ていただきますと、ここからICTが少し関わってきますが、一番上にあるのが個別最適な学びです。一斉に40人の子どもが一つの課題を解くのではなく、一人一人の学習の歩み、それからつまずき、それぞれに対応して子どもが自分のペースで勉強できるということをやろうとしています。それと補い合うものとして、右側にあるような協働的な学びです。

注意しなくてはいけないのが、個別最適な学びがICTで、協働的な学びが対面というわけでは決してなく、先ほどの動画にもありましたが、ICTを使うことによって、より協働的な学びも可能になるということは押さえておく必要があるだろーうと思います。

その次のページは今後の方向性ですが、一斉か個別か、履修主義か習得主義かという二項対立でなく、どちらの良さも適切に組みあわせるハイブリッドがこれから求められるべきものだろーうということが押さえられています。

左の一番下の囲みですが、これまでの実践とICTの最適な組み合わせを実現するというで、これまで難しかった可視化というか、子どもたちの学びが見える形になることも大事だろーうと思います。

それから、GIGAスクール構想で、対面と遠隔オンラインをハイブリットしていくこと、対面や児童生徒同士の学び合いということも絶対に大事だということが書かれています。

最後のページがオンラインについてです。先ほどから出ていますようにオンラインと言っても、同時双方向とかオンデマンドで課題を提供するなどいろいろなパターンがありますが、狭い意味での遠隔授業はセーフティネットで、不登校の子どもたちのための学びであったり、何かの時に休業状態になり学校に行けなかったりするときに機能するということです。むしろ、日常の授業の中でICTを活用していくこと、これが主体的な学びになっていくという

考え方がここに出ています。

真ん中の（２）のところですが、具体的には学習履歴スタディログです。先ほどの個別最適化で、子どもたちの勉強のステップが小さい段階に分かれており、子どもたちがログインして問題を解き次のステップに進みますので、いつログインして、何分勉強して、その結果がどうだったのかというのが全部残っています。それを先生方が確認しながら指導していくスタディログとしての使い方。それから、ＣＢＴというかコンピューターベースでのテストというのもこれから当然増えてきます。

それから③は、具体的な授業づくりです。対面の場面と、電子黒板を使うような場面、タブレットを使う場面、それぞれ組み合わせて、子どもたちの学びをきちんと保障することが必要になるだろうということが文科省の方針としてあり、来年ぐらいには本格的に回り出すだろうと思います。

そして、今日のテーマですが、この組み合わせはどうすればいいのか。いろいろな先生、子どもがいるので一律にはいかないですが、先ほどの流れで言うと個別最適化に乗れる子どもは、どんどん自分で勉強して小学校低学年で高学年の勉強まで行ってしまうような子どもと、全然ログインせずにずっとそこに留まっている子どもがいると思います。

実は、大学生にもこの個別最適化英語履修プログラムというのがあり、ログインしてスモールステップで勉強して結果を出していくのですが、やる気のある学生はどんどん進んでいきます。強制的にログインさせ勉強してもやる気が無ければ、特に語学は伸びないです。

そのあたり、いかに教員、先生が子どもたちをエンカレッジして、ちょっとでも頑張った子どもによく頑張ったと言う、これは対面というか双方向で励ましてやることです。

先ほど教育長が言われたとおり、家に持ち帰ってタブレットを操作するとなると、家庭も巻き込んで、子どもたちと一緒に学んでもらうことも必要ではないかと思いました。

<高垣市長>

ご説明いただいたのは、１０月７日の中教審の分科会の資料ですから、文科省における最先端の課題整理がなされているものだと思います。そういう中で、個別最適な学びというのと、協働的な学びというのが対義的に描かれていましたが、それを支えるのがＩＣＴであり、どちらかに偏ったものではないというご指摘はまさにその通りで、そういう使い方をＩＣＴがしていけないといけないのではないかと。

それで知・徳・体の話があり、徳についても世の中に様々な情報がある。それをうまく子どもたちが引き出す、あるいは教師がそれを提供していく中で、そういうものが育っていくというようなことでしょうか。

ありがとうございます。それでは、デジタルの世界で活躍されて来られた京極委員から、これからの子どもには絶対デジタル技術というものが需要だと思いますが、どのようにお考えか伺います。

<京極委員>

坂越委員がおっしゃった通りだと思います。私もオンライン授業をしましたが、オンライ

ンは先ほど教育委員会からの資料にうまくまとめられたように4つのパターンがあります。ICTはツールでしかないので、ますます先生の能力が問われるところが入ってくると思います。我々が一般的に考えているオンラインというのは基本的には非常時で、通常は対面授業なので、そのツールとしてのオンライン授業ときっちり分けて考えないと間違った方向に行くような気がします。

今の話はどちらかというと対面ベースで、ICTをツールとして使うということなので、これはどんどん使うべきだと思います。ただし、先生方はけっこう大変で、先生方の能力がかなり問われるところがあると思います。そのときに大事なのは情報収集能力で、先生が自分の教える分野でどういう情報があるのかというのは、ある程度見ておかなければいけません。先生方だけではできませんので、教育委員会がサポートしていく必要があると思います。

私がオンライン授業をした中では、学生にY o u T u b eといった新しい情報を常にダイレクトに見せながら行くと、そういうところから刺激をさらにもらえるという意味では良かったと思います。従って、対面の中でも先生方が上手に授業を展開されるのが大事なことだと思います。

もう一つは、大学でいつもやっていますグループラーニングみたいなもの、授業時間として入れるのは結構厳しいかもしれませんが、できるだけたくさん入れて子どもたちがディスカッションして考えられるような授業をした方が良いと思います。

教育委員会でも話しましたが、児童生徒の受けた印象と先生方の印象のアンケートをとりながら、内容を変えていく必要があると思います。次年度、3年後どうするのかということも含め、ある程度ロードマップみたいな形にして進めていくことが大事だと思います。

<高垣市長>

近畿大学工学部では、前期はほとんどオンラインで授業をされ、その中で様々な課題も出ているのですが、一方でその教育効果も出ていると思いますがいかがでしょうか。

<京極委員>

学生、教員の意見をまとめて見ると、すごく良かったという学生も結構います。例えば、大学の講義では人数が多いので質問しにくい、オンラインだと質問しやすいというような意見も出ていますので、全部が悪いわけではないと思います。本当にやり方かなと思います。

<高垣市長>

傾向的にはどうなのでしょう。やる気がある学生にとっては、オンラインは有効ですか。

<京極委員>

坂越委員がおっしゃった通り、大学生しか分かりませんが、基本的にはやる気のある子にはすごく良いと思います。刺激を与えられるし、新しい情報も先生方が話すよりも取って来られるので、やる気のある学生はどんどん伸びると思います。なので、伸びる子どもはどん

どん伸ばしてあげて良いと思います。要は個の特性を伸ばすような形を文科省がいわれているわけですから、それはどんどん伸ばしたら良いと思います。

<高垣市長>

伸びる子は自ら学習を進めていきますが、それについていけない子ども達をこれからどうしていくのかというのが一方の課題として浮上するのでしょうか。

<京極委員>

あくまでもツールなので、復習をさせるとか少し宿題を出してあげるとかして、それに対して今度は個別に対応していくというのが正解に近いところではないでしょうか。

<高垣市長>

対面授業の中でも、子どもの理解度あるいは到達度がどうかというのを、これまでもいろんな形で整備され、それに基づく教育も展開されてきたと思うのですが、さきほど坂越委員のお話の中で、ログメーターでどれぐらいのレベルに達して、どれぐらいの時間そこで学習して次のステップに行くのかというのは、全ての子どもで採ることができるようです。そうすると、よりその子に合った教育というのができるような気がします。

島本委員は、対面授業でベテランの先生でしたし校長もされました。そういう視点から見たときに、これからの教育をどのように展開していったらいいのか、これまでのキャリアから、このデジタル化についてどのように思われますか。

<島本委員>

デジタル化して不安に思うのは先生だと思います。どんな授業風景を作ったらいいのか、特にベテランの先生の情報機器への抵抗というか、そういうものも含めて不安は大きいと思います。しかし、これまでも1年生、2年生の社会科と理科がなくなり生活科になったときには、どんなことをするのだろうと戸惑いました。教科書もあの当時無かったので、バケツに稲を植えたり、そばを作ったり、それからこんにゃくも作ったりと、どこかがやったものをモデルにして模索しながら生活科というものが今あります。その後、週5日制になり土曜日学校が無いということでどういうふうになるのかということもありました。最近では、総合的な学習の時間が100時間単位ぐらいあり、どんな授業をしたらいいかというように、今まで教員は様々な変化に直面してきましたが、その都度、どうしたらいいのか、子どものためになるのか、子どもに力をつけるということを考えてきたと思います。

先ほど評価のところで、一致したデータや点数といった信憑性があるものが出てくるのだと思いますが、忘れてはいけないのは一人一人への声かけとか寄り添うとかはどんなことがあっても、デジタルになっても大事なことだと思います。

さらに、東広島では授業の匠や達人、名人がたくさんおり、そういう先生は新しいものが入ってきても使いこなします。教育の基本というものがあれば、新しいツールが入ってきても、東広島ではできるのではないかと考えています。

私が校長のときによく言われたのは、何かを始めるとき、こういうふうに時代が変わるからこれは取り入れましょうというとき、それが好きか嫌いかは校長が決めなさい。ただし、それが良いかどうかは地域や保護者の声を聞きなさい。最終的にはそれが正しかったのか、良くなかったのかは歴史が決める。

これから社会がどんどん変わっていくとき、どのように取り入れるかを学校現場と真剣に考えて今こそ取り入れなければ、将来、歴史があのかきにやれば良かったということにならないよう思い切った改革は必要だと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。

心強い話を聞けたような気がします。東広島の教育はレベルが高く、それは先生方のこれまでの真摯な取り組みの結果で、いろんな変化に対して柔軟に対応されてきたためです。振り返ってみると100年前、世界ではスペイン風邪が流行っている頃、この地は檜高憲三先生による西条の独創教育が全国から注目を浴びるような所でした。

それからすると、また改めてこの新しいデジタルの世界で注目を浴びるような教育環境を我々は作っていかなければいけません。その中で、人的資源もしっかりあるというお話をいただきまして安心しました。

一方で、家庭が一つ課題になってきそうなお話が出ました。西村委員から、そういう視点から見たとき、このGIGAスクール構想の推進について、何か不安であるとか、こうあって欲しいなということも含めてお話いただけたらと思います。

<西村委員>

私の子どもですが今年4月に中学そして高校にそれぞれ入学しました。休校のときには、まさかこんなに長く続くとは思わず、再開するまでの間、いつ学校が始まるだろうという不安の中で過ごしていました。休校になった時は復習など家庭学習をしていましたが、段々と目に見えて子どもや周りの子たちの学習意欲がなくなり、学習よりも生活自体に不安をおぼえるような感じで過ごしていました。

GIGAスクール構想の推進について、親としては休校により子どもたちを家庭で見なくてはいけない経験をしたので、また同じような場面になったとき、子どもたちの学習に対する不安な気持ち、日常生活の不安な気持ちを少しでも軽くできるようなものになれば、本当にありがたいと思っています。

議題の対面授業の良さとオンライン授業の良さということについてですが、私たち親世代が受けてきた教育と子どもたちが学校で受けている授業内容などは、基本は同じですが付随する知識などはとても膨大な量だなというのを先日の中学校の教科書選定の際に感じました。

そういった意味で、教育長もおっしゃいましたが、学校での対面授業で学んで分からなかった部分、これってどういうことかなと思うことを家庭に持ち帰りタブレットで調べもう一度見直すとか、もしくは次こういうことをするのかという予習とか、そういったことに活用していただけるというのは、本当にありがたいことです。

個別化が進むということが出ていましたが、オンラインのような授業でも、対面授業でも個性の違いというのは出るのではないかと思います。興味のあることはどんどん予備の知識として増やしていける可能性がありますし、あまり興味の無いものを後から見ることにはしないかもしれませんが、いざとなったら見られる学習環境があるというのは重要だと思います。

GIGAスクール構想が進むと、家庭学習がだいぶ変わっていると思います。保護者も一緒に勉強して欲しいという話が出ましたが、親が受けた教育にプラス、子どもの面倒を見ながらタブレットなどを活用して、子どもがどういう教育を受けているのかを学ぶ良い機会だと考えます。家庭で子どもと一緒に学ぶ姿勢が大事ではないかと思いました。

<高垣市長>

ありがとうございました。

GIGAスクールの推進というのは、学校にも家庭にも大きなインパクトを与えていると思いますが、皆様方は前向きにこれからの子どもたちの能力を引き出すために重要なものではないかという共通した認識をお持ちでした。

それと、対面事業とオンライン授業をどのようにハイブリットするかについても議論するつもりでしたが、そこの深掘りは足りませんでした。いずれにしても対面授業とオンライン授業を二項対立に考えるのではなく、そこにICTという技術を使いながら上手い組み合わせをしていく必要があるのだと思います。

いろいろいただきましたご意見は事務局で整理しますが、この件に関してこれは言っておきたいということがありましたらお願いします。

<渡部委員>

教員のスキルアップについては、現実的にとても重要でいろいろな研修をお考えだということですが、先生方も忙しい状況の中なので効率的に確実に操作できるような環境づくりをしていただきたいと思います。

幸い本市は大学や研究機関がたくさんありますので、そういった面からの支援も受け入れやすいのではないかと思います。ぜひ、進めていただければと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

これから進めるにあたって大変重要なテーマだと私も思っているところです。早速11月のシンポジウムを皮切りにいろんな形で研修をやっていく必要があると思っています。

それでは、2番目の議題としてこれからの時代に求められる教師と児童生徒とのコミュニケーションのあり方について、特に先生方が非常に重要な役割を果たしていく必要があると思います。教師にどんなスキルがこれから新しく求められるのか、そして今まで培ったスキルもまた絶対必要なもので、維持していかなければいけないことがあると思います。

まず、教育長からお願いします。

<津森教育長>

スマホのところで少し説明があったようにと思いますが、ICTというものを使うからこそオンラインでこれから繋がることもある、あるいは学習が個別化するからこそ、一人一人の子どもの学習の様子を教師が的確に評価をする。そして、良いところや頑張ったところをしっかり褒めアドバイスする。そのことが、これまで以上に大事だということがあると思います。

コミュニケーションということで言えば、対面に勝るものはありませんが、子どもの中には、対面ではコミュニケーションをとりにくい子がいることも事実です。そういった単線型のコミュニケーションの取り方でなく、複線型のコミュニケーションを取るためのルールといますか、システムみたいなものも必要になってくると思っています。

<渡部委員>

おそらく、最初はなかなか操作がうまくいかなかったり、機器のトラブルが起こったりと、自信を失ってしまう先生がいるかもしれませんが、機械の操作能力でなく、基本的には教師力といいますか、先生の力があって初めて教育が成り立つわけです。ぜひ自信を持ってその能力を発揮して欲しいと思います。

要するにステップ・バイ・ステップの最初のステップのところですので、いろんなトラブルはあると思いますが、クリアして次のステップに進んでいただきたいと思います。

<坂越委員>

コロナ禍のときに他の地区で出た問題ですが、先生が子どもや家庭と連絡を取るとき、自分のスマホは基本的に使ってはいけないことになっており、本市もそうだと思います。もちろん、教員と児童生徒の個別的なやりとりは注意しなければいけません。今後タブレットという形で連絡を取れるようになればその問題も解消されるのでしょうか。例えば、教員がそのネットワークに入りやすいようにしていただきたい。コロナ禍のときの課題として、子どもに連絡するため職員室の電話待ちの列ができたという話も出ていましたのでそういう活用が一つ。

それから、これは教員養成に関わる立場から言うのは申し訳ないのですが、子どもとのコミュニケーション力と言ったら広すぎますが児童生徒の理解です。新卒の先生がベテランの先生のように、この子どもにはこんな声をかけたらいいとか、保護者にはこういうふうに伝えればうまくいくというところが、特に新採の若い先生は力がつきにくい。

ぜひ、校内研修なり、先輩の先生が若い先生に付き合ってもらう時間について、忙しくて難しいかもしれませんが、お願いしたいです。

<京極委員>

教育長はじめ、皆様方のおっしゃった通りだと思いますので、これ以上言うことはないのですが、やはり児童生徒とどんなふうに向き合えるかという力だと思いますので、そこは全

く変わらないと思います。

あくまでも I C T とかはツールなので、先生方も児童生徒も使い出したら多分使えると思います。

もう 1 点は、教師間の連携が大事なのではないかと思います。個別化をしていくと、教師間の連携を取れる仕組みや、研修というのが大事なのではないかと思います。

<島本委員>

先ほども言いましたが、声かけ、寄り添いというのが基本だと思っています。機器で子どもを操る、教師が機器に操られるような教育環境では良くないと思います。ボタン一つで、子ども達に教えた気になったり、ボタン一つで良い授業したように錯覚するようなことは危険だと思います。今回のガッツ（東広島学校通信ガッツ！）にも出していただきましたが、信頼が大事だと思うので、会えて嬉しくなる先生、オンラインとかで授業し休校でなかなか会えなかったけど、次に学校に来たときに会えて嬉しい先生を期待したいです。

<西村委員>

先生がこんなことが楽しいとか、こんな物が良いと薦められるものについて、子どもたちは興味を持ちます。先生方には、I C T を子ども以上に活用していただいて、先生方の世界を広げていただけたらと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

ここでは、こんなスキルが新たに必要なのではというご意見が出てくると思っていたのですが、これまでも教師に必要な教師力であるとか、向き合う力であるとか、あるいは会って嬉しくなるようなまさに人間力もある先生というのが、この新しい G I G A の時代になったとしても絶対必須だなという気がしました。

それと合わせて、やっぱり先生方の連携という中で、この新しい技術に合ったような教育をしていく必要があるのだらうと思いました。おそらくベテランの先生は、機器の使い方の習熟度からいうと、若い先生に多分劣後するのだと思います。ひょっとしたら、その自信を失う可能性もあります。そういうことがないように、教育現場としてはサポートもしていただきたいし、ベテランの先生が持つスキルを例えば水平展開していく必要があるのだらうと思いました。

いずれにしても、教師力というようなところを、新卒の先生にしっかりと教育するような仕組みも必要で、これはやはりオンザ・ジョブ・ワークの中でやっていく必要があるのだらうと思いました。

さて、二つの点について議論していただきました。総括的に見て何か、これは言っておいた方がいいということがありましたらお願いします。

教育長から何かありましたらお願いします。

<津森教育長>

タブレットが入るまでに大分かかり、来年1月ぐらいという話ですが、それまでに校長先生、指導主事の先生を通じて各学校にたくさん情報提供しています。タブレットというのは黒船なんだ、もう元には戻らないのだという説明もしました。そういう中、不退転の気持ちで学校も頑張って準備をしてくれていると思います。大きな変革ですので相当な苦労はあるだろうと私は思います。

物事には、すぐに役に立つものはすぐに役に立たなくなるという言葉があるように、安易な気持ちでさっと使い終わってもういいでしょみたいな形ではなく、いろんな苦勞をしながら自分たちのものにしていくスタンスで進めたいと思います。

もう1点、先行してタブレットドリルという取り組みがあります。これはインターネットでどの学校からでもつながりますし、アカウントがあれば子どもが家のパソコンから接続することもできます。一番研究しているのは龍王小学校でして、ここでデータを取ると、5段階評定の1の子ども12人中9人の学力が向上しました。2の子どもは47人のうち31人が向上しました。中には偏差値が10ポイント上がった子もいます。これは1月から子どもたちが自ら取り組んだ学習です。

しかしながら、みんなが使っているわけではありませんので、先ほど坂越委員からお話があったように、やる気にならないとどうしようもないですから、そういう部分は大事にしていかなければ、全面展開というかみんなが使って良かったということにはなりません。どうやったら子どもたちがタブレットを使いこなしていけるのか。そういう気持ちを育てていくという、教師にとっては大きな宿題もあると思ったところです。

<坂越委員>

本当にその通りです。個別最適化の良いところというのは、小学校1年生に返ってそこからスタートできる。学び直しができ、達成感も感じられる。ただ、隣の子どもが6年生の勉強していて、こっちの子どもは1年生の勉強しているところを配慮しないと、次のステップにいく気が失せる懸念があります。そのあたりも先生の力ですので、よろしくお願いします。

<高垣市長>

ありがとうございます。

我々としても暗中模索というか、なかなか前が見えない状況の中ですけども、先生方のお話を聞いて、やはり最終的には人間力の中で子どもたちの興味をどう引き出していくのかということが大変大きい。最後に教育長から龍王小学校の話が出ましたが、明らかに効果はある。でもどうやって子どもたちをその場に、引き込んでいくのかということが大変重要なテーマで、これは家庭も含めて一緒にやっていく必要があると思いました。

本日は本当に貴重なご意見をいただきまして誠にありがとうございました。